

## 航米日録現代語訳

Rev.2 2021.03.06, Rev.1 2017.06.10

2016(平成 28)年 08 月 21 日

菅原 政治郎

注意：現代語訳の作成に当たっては、以下の点について心した。

- (1) 「日本思想大系 66 西洋見聞集」(岩波書店,1974 年 12 月)記載の「航米日録」(沼田次郎氏(東大名譽教授)校正)をほぼそのままに現代語に変換するよう心掛けた。
- (2) 玉虫自らが注意書きした箇所は( )内に示した。尚、名字の記載は「玉蟲」が正しい表記であるが、上記西洋見聞集では「玉虫」と記載があり、筆者(菅原)の独断により「玉虫」と表記した。(Rev.1)
- (3) 地名、呼名については、沼田次郎氏の校正註を基に現代語に変換した。沼田次郎氏の校正註は《 》内に記載した。
- (4) 校正註について疑問がある点、或いは読者の利便を考えた註を筆者(菅原)の独断にて付加した。それを【 】内に**朱記**にて示した。
- (5) 2 月 2 日午後 6 時頃に、東経から西経へ日付変更線を通じたので、日にちを減ずる必要があるが、そのままになっているので文中の曜日が合わなくなっている。このため筆者(菅原)が日にちを修正した。尚、玉虫の日付を【 】内に**緑記**した。
- (6) 森本角蔵氏著「日本年号大観」(講談社：昭和八年六月)に拠れば、万延元年(1860)は旧暦 3 月 18 日から始まるので、原文の註に記載ある「万延元年庚申春正月十八日」は正確には旧暦安政七年庚申春正月十八日とすべきと思われる。以下筆者(菅原)の判断にて年号を記載した。
- (7) 旧暦と新暦の対応は、筆者(菅原)が付加した。
- (8) 距離について、海上での里表示については、海里(約 1.8km)と判断して数値化した。米国の地上での里は、1 里=1.6km として数値化した。日本での里は、1 里=約 4km として数値化した。又、1 町或いは 1 丁は約 100m として数値化した。一間=1.8m として数値化した。これ等の数値は概算値である。
- (9) 木・草花・魚等は「カタカナ」で記載した。

## 航米日録 卷一

【江戸出立から横浜港を經由して、日付変更線を通り、ハワイ滞りまで】

万延元年(1860)庚申春正月十八日《新暦 2 月 9 日》、正使外国御奉行豊前守新見使君(正興)、副使外国御奉行淡路守村垣使君(範正)、御目付豊後守小栗使君(忠順)、その他属官・従臣総計七十七人、各軽装で米国ワシントンへ条約を締結するため、幕府の命令により、米国で艀装されたポーハタン号(船名)に乗り組み、米国へ渡った。これは日本初の快挙であり、有志の者誰か付き従わない者がいようか。唯、人数に制限があり、どう仕様もない。自分【玉虫】は幸運にも新見使君に随行することが出来た。自分は元々書生で俗務に疎いが、【随員となったからには】雑事をするのは当然である。しかし、船中の紛擾は常に起きており、且つ、米国は万里外の所で、言葉は通ぜず、聞き取りは更に難しい。このためどの様にして政事・物情を深く観察することが出来るのだろうか。遺憾と言う以外ない。このため、自分【玉虫】の独断偏見にて本旅行日記を記述する。恐らく誤解が多いことと思う。しかし一を知って十を推測するという言葉がある様に、その大凡の事は分かるであろう。これは他の人の失笑を顧みずに記述する理由である。玉虫誼、記載する。

【「玉虫誼」と有るが「玉虫誼茂」のこと。仙台藩の士風として自分の名前を記述する際、一字を闕略(けつりやく)する事がある。小生のホームページの「國恩記卷一 凡例」を参照されたい。尚、玉虫左太夫のご子孫で宮城県多賀城市の教育長を務められた「玉虫誼」氏(故人)が居られた事を追記する。】 Rev. 2

### 旧暦安政七(1860)年 1 月 18 日(新暦 2 月 9 日) 晴

午前 10 時頃出発。(外国奉行の新見豊前守正興は当時の江戸飯田町中阪上に住んでいた。) 築地に在る講武場に着く。道路に沢山の人が集まり、米国(アメリカ)行きの一見物する。友達数十人が激励の詩或いは文を作って激励の見送りに来た。この講武場から先は従者の人数が 9 人に制限された。ここで各人が昼食を摂り、午後 2 時頃小船に乗って三里【12km】先の品川沖まで行き、停泊している米国蒸気船ポーハタン号《Powhatan: 1850 年に建造された米国海軍のフリゲート艦。外輪汽走艦》に乗船した。船上では直ぐに祝砲を打ち鳴らし、又、洋楽を奏して歓迎してくれた。それと同時に小砲隊が嚴重に警備してその後隊を解いた。夕刻に横浜港に着いて碇泊する。さて船上の米国行一行は船の前後左右を行き来し、荷物の有無を確認して、足の踏み場もないほどの雑踏であった。その後暫らくして自分の居場所を決める。ポーハタン号と言っても船が狭いのは言

うまでもない。船の大略は以下の様である。

艫(船尾)の甲板の左右に船室を追加造営した。大きい物は縦二間【3.6m】、横一間半【2.7m】、小さい物は縦横一間【1.8m】、各部屋には10箇所の隔壁がある。又、中央のマストの左右に二部屋が在り、左右に隔壁が有り、二段になっていて長さが一間【1.8m】である。これらは全て寝室として使用するものである。一部屋には多くて10人、少なくても6~7人となっている。自分【玉虫】の部屋は縦横一間半【2.7m】で、4個の隔壁が有り、その部屋に7人が居り、甚だ狭いもので、膝を入れるのも大変な状態である。この様な状態であるので、他の部屋がどの様な物であるかは、推測に難くない。唯、御奉行と御目付の部屋は船尾の上層・中層に設置されて広くて綺麗なものであった。その他、渡米の幕府執政に従事する者は、供の者達よりは少しましな状態であった。食事については、賄い夫が居るけれども、使節団の人数は70人程であるので、食事時には雑踏して我先にと食している。その苦難さは想像出来るであろう。


#### 旧曆安政七(1860)年1月19日(新曆2月10日) 晴

船に留まる【横浜】。今日碇を揚げて出向するはずであったが、英国の公使ラザフォード・オールコックより支障を申し入れて来たので、船に留まることとなった。又、金銀交替のことと言うことでもあった。自分【玉虫】は幕府執政に従事していないので、詳細は分からない。今日まで色々と騒がしかったが、午後になって静かになった。

#### ポーハタン号の大略

長さ41間3尺【74.7m】、幅七間半【13.5m】、甲板下深さ四間五尺【8.7m】(4層)、砲窓約10、皆カノン砲、初層：雑庫、二層：雑庫及び士官部屋、三層：船尾は司令官室、左右に士官の部屋、これらの部屋は綺麗である。船首には下士官の部屋。これらは大部屋となっている。寝室は皆ハンモックになっていて、隔壁はない。四層：檣(ほぼしら)3、その他船具をここに置く。台所、便所等も有る。船尾の方は前述したとおり、日本人用の部屋となっている。蒸気器械は中央に在って、その精密さは人目を驚かすものである。このため、自分が詳細を記述することは出来ない。船には389人が乗船し、その内、日本人は77人で、米国人は312人である。船の規則については極めて厳格で、士官その他水兵に至るまで、当直が有り(時間が来ると交替)、各自の職務を励行する。自分以外の職務に着くことは全くなく、波浪状態でも仕事を怠ることはない。10日に7~8回、或いは4~5回その職務を変更し、且つ人

数を検査する。変更するときには、太鼓と笛を混ぜて人数を揃え、水夫達は、その職務関連の器械を携行して整列する。小砲隊は一行になって、水夫達(ゲベル銃は持っていない)とは混成しない様になっている。その後、士官の者1～2人、サーベルを下げて来て、その職務を交替する。交替が終わると再び太鼓と笛を鳴らす。そうすると、全員その場を離れる。日曜日には皆衣服を着替え、牧師の説教を聞く(牧師が聖書を読む)。その日は一日中、職務を休む(職階を問わず、かつ、聖書を読むときは必ずしも本文に則ることはしない)ということである。船中では船長に従うのが規則であるので、船毎に大同小異がある。日に2回或いは1回これを行う。今回ニューヨークから帰国時に乗ったナイアガラ号は尤も厳格で、日に2度は勿論、夜中でもランプを点し聖書を読んでいた)。又、日に3回は水夫にビールと言う酒を与えている。此の時は太鼓のみを打ち鳴らして人数を集合させ、ビア樽を船上の中央に置いて、士官の一人が、水夫各人の名前を呼び上げて、ブリキで出来た五

勺【90mL】のカップ  にビールを注いで与える。食事は滞船と航船とは異なる。滞船中は大牛を捌き、毎朝目方を計って各自に分け与える。この外にパン、吸物の類がある。航海中は、塩漬けの豚肉、乾パン、ビーンスープが出る。外にかゆの類、キュウリの漬物(ピクルズ)。これらはどれも水夫の食事である。士官の食事には、航海中と言っても羊、豚、アヒル、雛等の鮮肉が出る。(これらの動物は、船内で飼育しているものである。) その外、パン、卵などがある。じゃが芋、さつま芋の類は、上下共に諸品に合わせて食べる。調理人は大抵中国人か或いは黒人である。船の掃除は、毎朝水を流し、細沙で洗う。器械は油木綿或いは古い羅紗で拭いて磨く。此の作業は毎日行われる。但し、これには目の細かく詰まった石を粉碎した粉を用いてなされる。もし作業を怠ったり、騒がしくした者は、手かせをして牢屋に監禁する。音楽は天候に合わせて、日に二度或いは一度奏する。衣類は潮水で洗濯し、夜中或いは風があるときに干す。これは風、露で塩分を除去するためだと云っている。時の鐘が鳴る。日本のとは違い、昼夜を24時間に分割し、1時間毎に鐘を打つ【後述の数値から判断して、30分毎ではないか。或いは方位の認識に混乱があるのではないか】。一：九ツ二分五リン【夜0時30分】、二：九ツ半【夜1時】、三：九ツ七分五リン【夜1時30分】、四：八ツ【夜2時】、五：八ツ二分五リン【夜2時30分】、六：八ツ半【夜3時】、七：八ツ七分五リン【夜3時30分】、八：七ツ【夜4時】、一：七ツ二分五リン【朝4時30分】、二：七ツ【朝5時】、三：七ツ七分五リン【朝5時30分】、四：六ツ【朝6時】、五：六ツ二分五リン【朝6時30分】、六：六ツ半【朝7時】、七：六ツ七分五リン

【朝 7 時 30 分】、八：五ツ【朝 8 時】、一：五ツ二分五リン【朝 8 時 30 分】、二：五ツ半【朝 9 時】、三：五ツ七分五リン【朝 9 時 30 分】、四：四ツ【朝 10 時】、五：四ツ二分五リン【朝 10 時 30 分】、六：四ツ【朝 11 時】、七：四ツ七分五リン【朝 11 時 30 分】、八：九ツ【昼 12 時】。且つ、航海のときは、士官の者



2～3名が当直に当たり、船上で の様な形の伝声管を使用して指揮を取る。水夫頭は、鉄製のホイッスルを吹いて指揮を出す。その外、船のスピード、度数【経緯度と考えられる】を考えて少しも暇がない(度数は六分儀を使用し、スピードは砂時計を用いて計算する)。

#### 艦隊司令官(コモドール)その他諸官の給料

- 一 艦隊司令官 一年分 4000 ドル
- 一 艦長 一年分 3000 ドルは艦長の給料であるが、ポーハタンの艦長の給料は 2800 ドルとの事である。
- 一 士官第一等から六等まで 一年分 1500 ドル
- 一 勘定役 一年分 3000 ドル
- 一 第一等医師 一年分 2700 ドル
- 一 第二等医師 一年分 1200 ドル
- 一 第三等医師 一年分 900 ドル
- 一 蒸気機関責任者 一年分 2000 ドル
- 一 同助役 一年分 1000 ドル
- 一 同助役 一年分 600 ドル
- 一 大砲係 一年分 1000 ドル
- 一 大工棟梁 一年分 1000 ドル
- 一 水夫長 一年分 1000 ドル
- 一 帆縫係 一年分 1000 ドル
- 一 勘定兼務係 一年分 500 ドル
- 一 兵隊指揮役 一年分 2400 ドル
- 一 神父 一年分 1200 ドル
- 一 水夫 一月分 12～40 ドル 人員 270 人
- 一 艦隊司令官から水夫に至るまでの食料費は一日 25 セントである。

船中の法令(これは艦長から出されたものと見られる。)

- 第一 艦長部屋の外、船の中層で喫煙することは禁止
- 第二 船中で紙製のカンテラの使用禁止
- 第三 艦長部屋の外、夜 10 時以降消灯の事
- 第四 料理室は、夜 10 時に終わる事。日本人用の料理室は、夜 10 時 30 分に終わる事。
- 第五 水の使用は船中で一人約 3.6 リットルの割りで料理する事。
- 第六 酒は船中の者(これは米国人を指す)に与えてはならない。又、持ち去られてはならない。
- 第七 火薬類及び火器類は日本人用に設置した部屋に置いてはならない。
- 第八 部屋に火を蓄えていてはならない。
- 第九 平日は船中の灯火に第一に気をつける事。
- 第十 官吏以外、船中の士官の部屋に入るべからず。
- 第十一 右舷の便所は第一等の官吏、左舷の便所は第二等の官吏が使用する。従者は船尾にある便所を使用する事。
- 第十二 船中の者(これは米国人を指す)が日本人に対して過ちをなしたときは、通弁官【通訳】を通してその顛末を第一等ロイテナント官《lieutenant、副官》に知らせる事。

上記の法令は、午後に船の中央に張り出された。何人も法令を守る事。但し、船尾にある便所は屋根がなく風雨のときは波しぶきが飛んできて、航海している者はその所に行くことが出来ず、従者は難渋する。このため、法令を犯して左舷の便所を使用する。これは当然のことで、叱責することは出来ない。

## 旧曆安政七(1860)年 1 月 20 日(新曆 2 月 11 日) 陰晴不定

滞船【横浜】。今日になって米国人と互いに親睦する。殆どは「日本お早う」或いは「ヨカジキヨカジキ」と言う言葉を覚えただけで、その外の侏離駄舌(しゅりげきぜつ)は尚更通じない。唯、米国人は大変丁寧で、誰も良く物事を教えてくれ、少しも隠し立てすることが無い。自分は元来、外国語を忌み嫌っているが、船中での楽しみが少ないため、米国人と交わって言葉を覚えたが、何もしないで日々を送るよりはやや勝っていると感じている。又、米国人を観察していると、各人その務めを忠実に実行して少しも怠けることが無い。上司が命令を下せば、瞬時にその事に取り掛かり、まるで肘が指を使っている様である。

## 旧曆安政七(1860)年 1月 21日(新曆 2月 12日) 陰晴不定、午後雪

滞船【横浜】。午後大雪。船上に降り積もった雪は、脛まで届いた。自分は革靴を持っていないので、裸足で歩行する。その難渋は大変なものである。

## 旧曆安政七(1860)年 1月 22日(新曆 2月 13日) 晴、北風、夜雨

午前8時前に出帆する。蒸気機関はフル稼働で、船は矢の様に早く、1時間程して横須賀沖の猿島に到達する。上総・安房は霞んで遥かに見え、安房の鋸山(のこぎりやま)【現在の千葉県安房郡鋸南町と富津市の境に位置する山】は斜めにそびえ、その山容は鋸に似ている。その名前の由縁である。本牧【現在の横浜市中区本牧】から猿島の間、雪後の岩礁は銀の様で、その絶景に対応するのにまるで暇など無いほどであった。唯、船の速度はたちまちの間に千変万化し、誰がその情景を認識できようか。午前10時過ぎに浦賀港を過ぎ、豆州大島の海に出る。安房の洲崎や伊豆の三岬【「真鶴・川奈・石廊の各岬を指すか」との脚注があるが、三浦三崎のことではないか】はあっと言う間に過ぎてしまった。是によって初めて、蒸気船の早いことを認識する。正午、既に40海里の航海(これは米国の里法で、日本での20里弱【74キロメートル】)に当たる。午後4時、日本の地を去ること80~90海里、霞んで見え、何処かははっきりと分からない。夜になって、にわか雨が降る。四方は暗く目に付く所が無い。このため唯寝るのみ。今日、船は東北に向かって進んでいる。

○寒暖計華氏49度(9.4℃)○午前8時出帆より正午まで40海里○北緯34度50分40秒○東経139度50分10秒

## 旧曆安政七(1860)年 1月 23日(新曆 2月 14日) 朝晴、午後西北風猛烈、暴雨

船は東北に向かって進んでいる。今日になって、全く日本は見えなくなった。四方は唯海ばかりである。午後、西北の風が激しく吹きかつ暴雨になり、波頭が天を突き波しぶきが船上に流れ込み、乗組員の動揺は尋常ではない。夜になっても風雨は止まず、甲板に設置した部屋へ雨水が入って来る。特に自分の部屋は川の様になって、座ることが出来ない有様であった。部屋の上段に居る人は難を逃れることは出来るが、下段に居るものは逃れられない。各官吏へその状況を報告し、御奉行部屋の次室を借りて休息したが、テーブルの器物が左右に転倒して、波頭の声が耳に響いて瞬時も眠りに着くことが出来ない。日本の遣米使70余名全員肝を潰し、一人として声を出すものが居なかった。まるで病人の様であった。夜0時になって、風波が益々激しくなり、陶器は砕け、木器は破れ、今にも船が沈没し溺れてしまうのではないかと心配した。一方、この様な業務に慣れていると見えて米国人の挙動は少しも変わらずにその業務を遂行している。特に当直の

者は各部屋を見回り、破損箇所が有るか否かを点検し、灯火が消えている所には点灯する。計器の転倒しているものは始末をし、一つとして仕事を漏らす事が無い。この様なことであるため、風波は何とも思っていない。そうであれば、米国人の対応は常の事であり、日本人の恐怖は彼等にとっては一笑に付すものであらうと、翌日になって恥ずかしく赤面の至りであった。

○寒暖計華氏47度(8.3℃)○正午まで203海里○北緯35度22分46秒○東経143度10分10秒

#### 旧曆安政七(1860)年 1月 24日(新曆 2月 15日) 陰晴定まらず、北風

船は東北に向かって進んでいる。今日になって雨が止み、昨日に比べると波浪は穏やかになり一同皆安堵する。時折、雨や雪が降ってくるが烈しくはならない。風は依然として吹き止まないが、夜も同様であった。

○寒暖計華氏50度(10.0℃)○正午まで203海里○北緯35度17分40秒○東経147度18分45秒

#### 旧曆安政七(1860)年 1月 25日(新曆 2月 16日) 陰晴定まらず、大北風

船は東北に向かって進んでいる。北風が烈しく、雨や雪が降ったかと思うと直ぐに止み、一日中その様な状態であった。波頭は高く、飛沫が船上に吹き飛んでくる。連日の波浪に日本人は皆驚いて肝を潰すばかりである。夜になっても風雨は止まなかつたので、船の揺れは烈しいが、一昨日に比べれば少し静かになった様である。

○寒暖計華氏43度(6.1℃)○正午まで204海里○北緯35度54分59秒○東経151度17分45秒

#### 旧曆安政七(1860)年 1月 26日(新曆 2月 17日) 晴、東北東の風

船は東北に向かって進んでいる。今日は碇を揚げてからかつて無いほどの快晴ではあるが風が激しく、船の揺れは23日を思わせるものであった。もっとも、風が逆風で帆を張ることが出来ない。このため、蒸気機関にて船が走る。夜になって風波が静かになり、皆安眠する。

○寒暖計華氏50度(6.1℃)○正午まで225海里○北緯35度51分29秒○東経155度45分

#### 旧曆安政七(1860)年 1月 27日(新曆 2月 18日) 晴、南風烈しい、夜暴風雨

船は東北に向かって進んでいる。南風を横風として受けて走る。波浪は特に高く、船上に飛沫が数回にわたって吹き飛んで来た。風を満帆に受けて船足が速い



性か、船の揺れは烈しくはない。唯、南風が生暖かく、日本人は気分が悪くなり、何時もと違っていた。午前 10 時頃に船上で音楽が奏でられる(晴天のときは毎日奏せられる)。大波で飛沫が飛んでくるのに関わらず、彼等米国人は悠然としている。この音楽を聞いて心が和み、船旅の苦難を忘れる。昔、日本では管弦の音楽を聞いて人の心が和んだという。今ここで西洋音楽を聞いて心が和むのであるから、日本の音楽を聞いたらどれ程和むことであろうか。歌舞音曲を捨て去るべきでないことは、この様なことから分かるのである。午後になって南風が益々烈しくなり、空模様は午前とは違ってきた。船の揺れは特に酷く、夜になって暴風雨となった。怒濤が押し寄せ、船が壊れるのではないかと思われるのが数回ほどあった。このため、船上を歩くことが出来ず、腹ばいになって進むか、米国人に助けられて進む有様であった。夜 12 時になっても風波が烈しく、まるで空を蹴り上げているようで船上での風の音を聞けば、日本人で肝を潰さない人があろうか。この様なときには唯ひたすら天運を待つ以外には施しようが無い。それから 1 時間程過ぎ、疲労困憊でぐっすり眠りに入ったが、自分【玉虫】の寝室は段上に有るけれども大砲の砲窓の傍(砲窓は一時的に閉めてあるが)であるので、怒濤が押し寄せ、あつと言う間に半間(0.9m)程壊れてしまって、そこより波が進入して、辺り一面は川のようになった。自分一人のみ災厄を受け、満身ずぶ濡れになり、耳、目、鼻、口全て潮水に浸かり、殆ど気絶状態でその場から逃げ去ることが出来なかった。その後にも波は押し寄せ、自分の体が部屋の後ろへ流されてしまった。どのような不幸中の幸いなのか、最初脱出しようと思っていた破損箇所は、その先は大海原で、もし脱出してしまっていたならば、大魚の格好の餌となっていただろう。波により押し流されたために、命が助かったのである。これは天の助けだと喜んだ次第である。その破損箇所より約 2m 程逃げたが、部屋に両刀を置き忘れたことを思い出し、直ぐに戻ったが波飛沫が烈しく中々部屋へ入れなかった。必死になって探したら、幸いなことに両刀は水中に有った。これを持って船上を腹ばいになり前進して、中層にある御奉行の部屋へ避難した。自分の衣類その他の持物は全て海水に浸かって、寒冷が骨身に染みた。誰かに衣服だけでも借りようと思ったが、皆この様な状況に戦々恐々となって、他人が苦しんでいることなど眼中に無い様子であった。ところが、自分と同室の松村吉次郎と言う人(村垣使君の従者。上総の出身で、剣の達人。江戸の清水卿(徳川齊彊)の長屋に居住)は、年齢 59 歳であるが鬢鑢(かくしゃく)としている人であった。その彼は自分より先に避難していて、自分【玉虫】の状態を見て綿入れ一着を貸してくれた。難儀な状態であったので、辞退しないで借り受けた。暫らくこの綿入れで過ごしていたが、3 時間程して又々寒冷が骨身に染み、身震いしてしまった。このままでは病気になってしまうと思ったが、外に手段が無く、仕方なくそのまま足を伸

ばして休息しようとして見回したら、熊の毛皮が有った。誰の所持物なのか知らないが、是幸いと借りて身に纏った。暫らくしたら寒さを忘れるほどになっていた。唯、風波は以前の状態で船の大揺れは数回に亘り、生活用品の破損する音が絶えなかった。この様な状態であるからどうして安眠など出来ようか。日本人は皆、戦々恐々として朝を迎えた。

○寒暖計華氏56度(13.3℃)○正午まで190海里○北緯36度23分39秒○東経159度28分

#### 旧曆安政七(1860)年 1月 28日(新曆 2月 19日) 朝南風、午後西風。晴

船は東北に向かって進んでいる。昨夜からの風雨は止まず、午前8時頃、船上へ上がろうとしたが船の揺れが烈しく、歩行が困難な状態である。米国人は手で危ないと示していた。午前10時頃、突然西風に変わり、雨が止んで波が静かになった。船上へ上がって自分の部屋を見たところ、部屋中の生活用品は言うまでもなく持参した書籍や必需品は残らず潮水に浸ってしまい、困惑頻りである。しかし、昨夜の危難の際に一命を失わなかったのは幸いなことであった。このため、目の前の心配は取るに足りないものである。第一に遣るべきことは、浸水した衣服等を乾かすことであり、船上に晒した。潮水であるため簡単には乾かず、その苦勞は推察に難くない。午後、水夫全員に昨夜の任務の慰勞のために艦長より1000ドルを与えるとの伝達があった。賞罰の明確な事については、考慮すべきである。昨夜の風波で船中の破損箇所は数箇所になり、特に司令官用の小舟一隻が波にさらわれてしまった。昨夜のような風波には20年来航海しているが遭遇した事が無いと提督が言っていたとの事。その様であれば、普通の船では直ぐに破損してしまうであろう。このポーハタン号は、米国でも堅牢な船で有名であり、危難を逃れる事が出来た。幸いと言うべきである。自分達の初めての航海で稀有な風波に遭遇し、心胆を寒くしない者が居ようか。午後、風波は大変静かになり、船のスピードが速くなった。日本人は皆生き返った心地になった。

○寒暖計華氏56度(13.3℃)○正午まで154海里○北緯36度48分33秒○東経162度34分

#### 旧曆安政七(1860)年 1月 29日(新曆 2月 20日) 朝晴、午後西北の風。

船は東北に向かって進んでいる。快晴。全天雲は無く風波も穏やかで、皆の喜び様はこの上ないものである。船上を縦横に歩行して、米国人と談笑している。自分は従者と言う立場上米国人と談笑の時間が取れない。一昨晚の濡れた衣服等を干そうとごたごたしていて、精力をこれに使う。潮水であるので簡単には乾かない。衣類はかなり着ることが出来るが、夜具は殆ど使用できない状態である。

友人の大浜玄之助(外国奉行定役の従者。武州熊谷の出身で、玉虫と江戸にて交際)は、自分の今の状態に同情して、布団一枚、毛布一枚を貸してくれた。友の親切心をどうして辞退出来ようか。借り受けて夜の冷気を防ぐ。これは幸いなことである。昨日午後より西風が吹き、船のスピードは速くなったが、夜12時頃に東風に変わって帆を張ることが出来なくなり、蒸気機関にて進む。この一兩日は温暖で、江戸の4月末の気候に似ている。

○寒暖計華氏56.5度(13.6°C)○正午まで208海里○北緯35度58分42秒○東経166度45分10秒

### 旧曆安政七(1860)年 1月 30日(新曆 2月 21日) 曇り、東北の風。

船は東北に向かって進んでいる。昨夜12時頃より東北の風が吹き続いており、蒸気機関のみにて進む。このため船のスピードは速くない。午後4時頃、風波が少し高くなってきた。夜になっても風は止まず、夜12時頃、風は南風に変わり風波は益々高くなってきた。船の揺れは尋常ではない。

○寒暖計華氏55度(12.8°C)○正午まで181海里○北緯35度33分25秒○東経170度21分33秒

### 旧曆安政七(1860)年 2月 1日(新曆 2月 22日) 大雨、南風烈しい。

船は東北に向かって進んでいる。今朝になって南風が益々烈しくなり、波頭は山の如く船に襲い掛かり、飛沫が船上に飛んでくる。碇を揚げてから数回目の暴風雨で、この様になっては又々大魚の餌になるかもしれない。皆、覚悟を決める。午後より波頭は烈しくなり、何度も波が船にぶち当たる。この様な状態は、先月の27日を彷彿とさせる。自分の部屋は、以前に記したように大砲の砲窓の側であり、修理したが、怒涛が烈しく隙間より潮水が浸入して来て、部屋が川の様になってしまった。この様な状態では、又々部屋が破損するのではないかと心配である。そのため、部屋の生活用品を残らず中層へ移し、そこで休息する。風波は止まず、体は左右に揺さぶられ、眠ることが出来ない。そのうえ、普通の人間の性癖として色々の事を考えて心配で時を過ごす。他人がこれを聞いたら大笑いするであろう。しかし、実際にその災難に遭遇してみると、致し方の無いものである。戦場であれば、互いに競い合って、生死を気にかけている暇は無い。大海原では唯風波に身を任す以外に無い。どんな妙策が有ったとしても、実施することは出来ない。船上で鬱々と日を過ごすのみである。波が静かな場合でも、色々の想いが浮かび上がってくる。まして風波に遭遇したときには、尚更である。この様な場合に、泰然自若としてられる人は、万人に一人位であろう。夜12時頃、船の揺れが益々烈しくなり、体を固定することが出来ず、柱に結んでいた綱

を用いて、体が動かないようにして夜を明かした。これまでの船旅で米国人の挙動を観察したところ、波頭が高く船が揺動して歩行が困難な場合は、お互いに手を取り合って助け、夜中に中層へ言って米国人と会うと彼等は「おはよう」と言って布団を敷きここへ寝ろと手で指し示す。或いは、日本人が悲嘆にくれた顔をしているのを見ると、「ヂキヂキ」と言って慰める(是はヂキに港に着くという意味であろう)。その外、何事によらず丁寧に世話してくれ、自分の我を捨てている。その親切心には感心するばかりである。この様であるから、徒(いたずら)に「夷人(いじん)」として米国人を見下したりすべきではない。米国人に対して、「聖教」を教え込めば必ずや礼儀をわきまえた人となるであろう。古より、聖人が現れずに、唯利益をむさぼる国となつては、悲しむべきことである。今日は、米国の初代大統領ジョージ・ワシントンの生誕日と言うことである。

○寒暖計華氏54度(12.2℃)○正午まで165海里○北緯36度30分55秒○東経173度33分03秒

旧暦安政七(1860)年 2月 2日(新暦 2月 23日) 朝風雨、西風烈しい。

船は東北に向かって進んでいる。昨夜からの風雨が止まず、午前10時頃になって雨が止み、風が西風が変わって船の揺れが止まった。午後になっても波は穏やかで、皆の喜びは相当なもので、昨夜の苦難を忘れて船上で談笑している。雨の後は雲霧が辺りに広がり、一日中鬱々とした景色であった。夜になって更に波は静かになって、皆安眠することが出来た。此の頃の時節は天候が変わり易く、一日の内で陰晴や風は定まり難く、晴れようとして晴れず、雨が降ろうとして降らず、江戸の秋末の気候を思い出させる。夕方午後6時頃に子午線(日付変更線)を通過する。子午線とは、東経/西経の切替線のことで、各国での日時は同じものではない。現在、この子午線は英国ロンドンを基準としている。この経線の差を考慮して、日時を修正している。今回、ポーハタン号でも一日を加える。これは地球が一周するので、その差が有るということである。詳細は、巻末に記述している。

○寒暖計華氏48.5度(9.2℃)○正午まで220海里○北緯37度51分55秒○東経177度36分15秒

旧暦安政七(1860)年 2月 2日(新暦 2月 23日) 【2月 3日】晴曇不定、西の風。

【日付変更線を通過したので、本日は2月2日とすべきである。以下同様に処理する。尚、玉虫の日付を緑記する。】

船は東北に向かって進んでいる。晴曇不定で、小雨が頻りに降ってくる。唯順風なので船足は矢の様に速い。フントルレーエセル(帆名)《オランダ語 onder

lijzeil：横帆の帆船で帆桁より外方に張り出した補助帆の一番下の帆》を始めて揚げる（これは常帆の傍に別に追加した帆で、順風以外は揚げないと言う事である）。愉快と言うべきである。本月一日は米国開祖ワシントン【初代大統領】の誕生日で、十二時（正午に当たる）に発砲してその日を祝うべきであったが、烈風暴雨であったため、その儀式を行えず今日の正午に祝砲二十一発を撃った。その後、日本の御奉行その他米国土官の部屋までチェリー酒等を出して祝賀する。朝夕音楽を演奏する。その人員を調べたところ、総計九名であった。尤も音声が和すること少なく、非常に野鄙で、聞くに堪えない。但し、九人は定数ではなく、後日他の船に乗った時には、十五・六人であったり、二十人であったりする。そうであるならば、定数はないと見える。午後2時過ぎ、米国人の食事として肉饅頭・焼鳥・蒸餅の類を持って来たが、臭気が鼻を衝き、自分の口には合わない。又、酒一壺あり、ビール（酒名）と言う。一口味わう。苦味であるけれども口を湿らすに足るものである。夕方、雲が晴れて上弦の月が波上に浮かび、辺り一面広々としてその絶景は言葉に言い表せない。碇を揚げて以来初めて月を見る。【月を愛でる日本人】一行の楽しみを思い知るべきである。

○寒暖計華氏56度(13.3℃)○正午まで220海里○北緯37度55分33秒○西経177度50分45秒

旧曆安政七(1860)年2月3日(新曆2月24日)【2月4日】晴、西北の風。

船は東北に向かって進んでいる。今日は碇を揚げて以来の晴天で、波浪は穏やかにして、まるで畳の上に居るような感じであり、皆の喜びはこの上なく、船上で談笑している。米国人も何時もと異なり、朝夕音楽を奏して楽しんでいる。これまでの航海で辺り一面は広々として海以外何も見えず、唯波の音を聞くばかりであったが、夕方になって、何処から飛んできたのか一羽の鳥が波に浮かんでいるのを見つけた（色黒く鶺鴒に似ているが名前は知らない）。その漂うところは分からない。

○寒暖計華氏55度(12.8℃)○正午まで204海里○北緯38度01分36秒○西経173度36分30秒

旧曆安政七(1860)年2月4日(新曆2月25日)【2月5日】快晴、東北の風。

船は東北に向かって進んでいる。今日は快晴で、一天雲が無い。それは江戸の4月頃の陽気である。午後東風に変わったため、帆を揚げるが出来ない。このため、蒸気機関で走る。夜になって、又東北の風に変わり、帆を揚げる。波浪は穏やかで、昨日と同じである。

○寒暖計華氏56度(13.3℃)○正午まで200海里○北緯38度04分30秒○西経169度

31分30秒

旧暦安政七(1860)年2月5日(新暦2月26日)【2月6日】快晴、東の風。

船は東北に向かって進んでいる。快晴で波浪は穏やかであるが、風速は一定していない。しきりに東北の風向きに変わり、帆を上下すること数回に及び、船のスピードは上がらない。夜になり、風が全く東風になり、帆を揚げるが出来なくなり、蒸気機関にて進む。

○寒暖計華氏53度(11.7℃)○29日の正午から今日の正午まで137海里○北緯38度21分12秒、西経165度48分15秒

旧暦安政七(1860)年2月6日(新暦2月27日)【2月7日】朝晴、午後曇、東北の風。

船は東北に向かって進んでいる。午後、東南方向のサンドウィッチ島《ハワイ》へ向かって進む。横浜で碇を揚げて以来、米国サンフランシスコを目指して進んでいたが、数回の風波で船のスピードが上がらず、予備の石炭を大幅に消費したため、今後風波に遭遇したときは前後に揺さぶられることとなる。このため、午後から東南方向に進路を変更して、直ちに横帆を揚げて進む。風が強く船の揺れが頻繁に起こる。午後4時過ぎに風が少し止む。

○寒暖計華氏55度(12.8℃)○正午まで163海里○北緯38度41分○西経162度24分30秒

旧暦安政七(1860)年2月7日(新暦2月28日)【2月8日】東北の風、猛烈。午後雨

船は南東に向かって進んでいる。風が激しく、手に持った承盤や茶碗の類迄吹き飛ばされ、船上を歩行することが出来ない。各人心配したが、午後になって雨となり、風が穏やかとなったため、船の揺れが少なく、皆は安心した。夜になって風が止み雨だけになったが、唯心配は自分の部屋に雨水が入り込むことであった。このため部屋で休む場所がないのが心配事である。

○寒暖計華氏59度(15℃)○正午まで209海里○北緯35度25分52秒○西経161度17分20秒

旧暦安政七(1860)年2月8日(新暦2月29日)【2月9日】雨、東風。

船は南東に向かって進んでいる。今朝風雨は止まないが、烈しく降る事は無いので、船の揺れは少ない。唯、逆風なので船のスピードは上がらず、蒸気機関をフルパワー稼働させるが何時も通りには及ばない。昨晚より暖気で、温度は華氏65度になる。

○寒暖計華氏65度強(18.3℃)○正午まで172海里○北緯33度11分11秒○西経160

度37分

旧曆安政七(1860)年2月9日(新曆3月01日)【2月10日】朝雨、午後微晴、東南の風。

船は南東に向かって進んでいる。夜明け頃雨が晴れる。午前8時頃又々雨となり、風も激しく昨日の状態と変化無し。午後漸く雨が止み、日が照るのを見る。風向きが東に変わり、横帆を揚げて進む。スピードは昨日に比べれば少し速い。午後2時頃雨が再び降ってきたが、烈しくはならない。夜、船の揺れがあった。

○寒暖計華氏65度(18.3℃)○正午まで162海里○北緯30度21分40秒○西経159度44分13秒

旧曆安政七(1860)年2月10日(新曆3月02日)【2月11日】晴、東南の風激しい。

船は東南に向かって進んでいる。今日も風が激しく、波浪が高くて船に打ち寄せ、雲霧の様に船上に飛沫が飛んでくる。唯、晴天のため直ぐに乾き、甲板を湿らすには至らない。ここで一笑に付す話がある。自分が先月27日の夜、夜具等が潮水に浸ったとき、それを乾かそうとしたが、雨が降り甲板が湿ってしまった。このため、晴天を待って必ず乾かす事にしている。今日は晴天のため、夜具等を船上にて乾かすが、烈風のため飛沫が飛んできて、却って潮水に晒され、着用することが出来ない。どうしたものか今回の航海では自分一人だけ苦難を背負っている。これは天が自分を玉にしようとして艱難を授けているのだろうか一人苦笑している。兎に角、艱難に身を任せている。

○寒暖計華氏70度(21.13℃)○正午まで110海里○北緯28度34分53秒○西経160度12分45秒

旧曆安政七(1860)年2月11日(新曆3月03日)【2月12日】半晴半陰、東の風激しい。

船は東南に向かって進んでいる。今朝から東風に変わる。波頭は烈しく天を衝く勢いである。船上を歩く場合は、用心をしないと倒れてしまう。雨は降っていないけれども、27日に似ている。午後になっても風は止まず、三番目の帆架が破損してしまった。この様な風は稀有なことであるが、米国人の動きは常と変わらず、ちょっと時間が有れば椅子に腰を掛け、或いは立って本を読み、中層は各部屋で読書しているか或いは飲酒・談笑して、何時もと変わらない。但し、普段彼等は感じないのか、或いは度量が広いのであろうか、自分なら直ぐに水中に落ちて溺れてしまうのではないかと気をもんでしまう。米国人の動作を観察していると、赤面して恥じ入るばかりである。夜になっても風は止まず、船上の部屋に

居ることが出来ず、中層の部屋へ行って寝る。上層の部屋とは違い、揺れ具合は少なく、ようやくと眠りに就く。米国人は親切で、今夜も色々と面倒を見てくれる。毛布を着せてくれたり、或いは自分の吸っていた煙草をくれたりした(この煙草は、噛み煙草で板のようになっており、煙を吸うのではない)。

○寒暖計華氏70度(21.13℃)○正午まで158海里○北緯26度01分58秒○西経159度37分21秒

旧曆安政七(1860)年2月12日(新曆3月04日) 【2月13日】 晴、南東の風。

船は東南に向かって進んでいる。晴天では有るけれども風が激しく、曇ったり晴れたり変化が烈しく梅雨の季節の様に雲霧が衣服を濡らしている。船の揺れは甚だしい。夜になって状態は同じである。今日はサンドウィッチ島が見えるとの事で、皆は首を長くして待っていたけれども、見えてこない。夜午前2時頃になって、左舷にようやくその島が見え、皆故郷へ帰った様な心持になり、船上に立ってその島を見て喜ぶ。自分は一人、中層に入って寝る。翌朝、船上に上ってその島を見てみるが、尚、模糊としてよく見えない。

○寒暖計華氏70度(21.13℃)○正午まで172海里○北緯23度20分33秒○西経159度05分45秒

旧曆安政七(1860)年2月13日(新曆3月05日) 【2月14日】 陰晴不定、東の風。

暁の時分、午前4時頃ハワイのオアフ島を遠く左舷に見る。此の辺りは島が近いのか波は静かで、進むこと2～3里【3.7～5.6km】で南に進む。午前6時頃になり、島の南側に沿っておよそ1里【1.8km】進んで東に進路を変える。東風なので帆をあげることができず、正午にオアフ港に入港する。日本と米国との国旗を掲げる。当島在留の米国領事及び三人が小舟に乗って船に来る。その後、ロイテナント官一人と士卒指揮官テーロル《ポーハタン号の海兵指揮官テイラー：Algernon S. Taylor》が上陸する。御奉行やその他の役人の宿泊所を借り受ける。その上で、使節一行が上陸する。陸上、車に乗って旅館【以下「ホテル」と記す】に着く。車は四輪で馬二頭、或いは一頭で引き、その早いことは瞬時にして1里【1.6km】位走ると言うことである。大略は以下の様である。上陸の際、海岸に男女数百人が来て、我々日本人を見物する。彼等は日本人の格好を見て笑ったり、或いは黙視したりしている。これはかつて日本人が外国人を見た場合と同様である。ホテルに入った後、市内を見物したが、我々を見ようと前後左右に男女が付きまとい、歩行に支障を生じる。夕方、宿に戻る。

○寒暖計華氏70度(21.1℃)○昨日の正午からオアフ港まで151海里6尋○北緯21度19分○西経157度52分



旧暦安政七(1860)年2月14日(新暦3月06日) 【2月15日】時々晴、時々雨。

滞留【ハワイ】。晴雨不定。晴天であったかと思うと急に雨が降って来て、道路は常に湿っている。自分は靴を持っていないので、歩行が大変である。午後に靴を買おうと街に出て、宿泊所から二丁程行き、そこに中華街が有って靴を売っていた。値段を聞いたところ、1ドル50セントと言う。自分は日本の一分銀【方銀】で買おうとしたが、ハワイ国の商人【在留の中国人であろう】はペンを取って「此の国では一分銀は使えない」と書いてきた。このため自分も筆で「自分はお金として一分銀しか持って居ない。どうすべきか」と書いた。商人は頷いて、またペンを取って「四個方銀可以兌換」と書いて来た。このため、自分が思うには、靴一足の値段は日本では一分銀二枚であったが、彼の商人の売値の一分銀四枚とは高いと思った。しかし、今買わないと屋外を一步も歩けないので、一分銀四枚を払って買って帰る。後で考えてみると、1ドル50セントは一分銀四枚半に相当し、これを一分銀四枚で買えば、値段は安い。自分以外の人でも求めても大抵、1ドル50セントと言われる。また、酒屋に行ってみると、米国人が来て酒を買うにコップ一杯に25セントを支払い、その外諸物を買う場合も大体これに準じている。ドルの価値はこれで推測できる。米国に着いたらまた、探してみたい。

○寒暖計華氏73度(22.8℃)

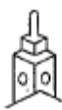
旧暦安政七(1860)年2月15日(新暦3月07日) 【2月16日】晴雨不定。

滞留【ハワイ】。今日も晴雨不定であるが、昨日に比べれば晴れている時間が多い。午後街に出て書店が何処にあるかを尋ねたが、発音が通ぜず、どう仕様もない。幸いなことに一人の米国人に逢って、手振りでも本の形を作ったり、或いはページをめくる仕草をしたところ、彼は頷いて案内してくれた。しかしどうしたことか、洗濯屋に連れて行かれた。また手振りでも細かに示したら、またまた頷いて分かったと言う様であったが、連れて行かれたところは写真屋であった。間違いではあるけれども、写真屋は一見の価値がある。このため、暫らく足を止めて見ていた。本島喜八郎という外国奉行調役の従者は、自分より先にその場所に来ており、彼と自分を別部屋に案内して、写真を映す。その素晴らしきは筆舌に尽くしがたい。大略は以下の如し。

最初に人の居ない別の部屋に二人を並べて、その隣に暗室がある。その場所に入ってガラス(客の好みにより大小あり。我々の写真の大きさは長さ6cm、横3cm)に薬2、3滴たらし、箱に入れて置く。これは薬を乾かすためであろう。暫らくしてこれを取り出す。板で四方を挟んで傍に置き、我々二人を正



しく立たせて、体が偏らないように鉄製の器具 で首を挟み、一間【1.8m】離れて高足の望遠鏡の様なもので見る。（見るときは首に黒木綿をかぶる。これは常は眼鏡に縫い付けている） 暫らくしてその中程を明けて、右のガラスを板に挟んだまま入れて、部屋中言葉を発せず静かにし、時々見て、その後、写真を写す頃合を考え、眼鏡の前面を蓋して、暫らくしてガラスを取り出し、暗室に入り、数滴薬をたらし、灯火(アルコールランプ)で乾かす。それにより、種々彩色すれば、二人の顔形は寸分も狂わずに写る。その奇妙で精巧なる事に驚く。この写真屋を出て、暫らくして書店に行くことが出来た。数万の本が書架に並べられており、どれも外国語で、読むことが出来ない。その値段の高いことは、日本の数倍ほどである。この島の地図を探そうとしたが、半葉紙で作られており極めて、雑である。四枚で1ドルと言うので買わずに帰る。隣の店に行ったが、そこは印刷所であった。大小の車【輪転機の事と思われる。以下「輪転機」と記述する】の精巧な仕掛けで印刷する。その精密さは筆舌に尽くせない。暫らくの間に数百枚を印刷するという。大紙を印刷するのを見ると、傍に一人居て輪転機を回転させる。輪転機の下に活版を置いて輪転機の回転にしたがって、印刷される。紙が輪転機の上に行くと、熊手の様な鉄で出来た前後に動く物で印刷された紙を押し出し、反転して輪転機の後ろに倒れて、紙は自然にその場所に整列して重なる。この外、目を驚かささないものは無い。午後4時頃、山麓の方に行ってみたが、3～4丁ばかりの所に教会があった。門が閉じられていて入ることが出来なかった。遠目には詳細に分からないが、大体瓦石を畳み、外壁を白亜に塗り、極めて



美しいものである。屋上には の様な高樓を設けている。高さは六～七間【12m】位で、天主様を祭る所であると言う。ここを過ぎ、十町【1000m】行った所は田舎で何も無いところである。一人の土着の人が居て、自分が遣って来るのを見て、盛んに手招きしているが、そこには入らずに通り返る。又一軒の家があり、女三四人が出て来て袖を引いて中に入れようとしている。止むを得ずその家に入ってみると、慇懃に待遇され、蒸芋を頂く。味は淡白である。又少し歩みを進めると、水田があった。キビ、稲を植えずに唯芋の類を植えている。此の場所で陽は既に西山に傾き、遠くに行くことが出来ずに宿泊所に戻る。

○寒暖計試さず

旧暦安政七(1860)年2月16日(新暦3月08日) 【2月17日】 陰晴不定。

滞留【ハワイ】。午前8時頃、英館に行く。老人・子供の女四人が居るが、男は一人も居ない。我々日本人を見ると、大変喜んで部屋から出て来て案内した。部屋には種々の珍しいものが陳列されており、中にテーブルが有り、その上に珍器・奇品を綺麗に並べ、懇懇にその品々を取り出して見せる。一人の女性が琴瑟《ハーブ?》に似た物を弾いて聞かせる。その様子は大体を後述する。又パンを持って来て食べさせる。彼女等は皆色白で、服装も美しい。ここを出て半町行った所に又英館と思える家に入ってみれば、女三人が居た。ここでも懇懇に待遇を受け、縫製を生業としていることを告げられる。日本とは違って手縫いではなく、前に高さ4～5尺【1.5m】、長さ3～4尺【1.2m】、幅2～3尺【0.9m】位の台があり、台の下に車があって機構を設け、台上に種々の精巧な器械があって針が上下するようになっており、台の下に足を掛ける所があり、ここへ足を掛けてその車を回転させることにより、台上の針が自然に上下するようになっている。瞬時に4～5尺【1.5m】も縫うことが出来る。糸の繰り出し等は皆台上に備わっている。縫合は、俗に言う勘清縫の様に極めて精密である。此の場所から色々巡り歩き、午後に宿泊所に帰る。午後又海岸の方に行ったが、途中で6～7歳の子供に出会い、その子が自分の所にパンを持って来た。外国人を恐れる様子も無く、笑みを含んでかわいい子供である。又少し行くと、琴の音の様なものがしょうしょうと聞こえてくる。暫らく足を止めて聞いていると部屋から十四五歳の女子が出て来て、部屋へ案内した。部屋の中に四十歳位の女性(先程の子供の親であろう)が一人おり、十二三歳の男子が三人のみである。誰も懇懇に待遇して、十四五歳の女子はマッチを持って来て煙草を勧めた。又、老婦は美しく彩色した糸で花の形に刺繍したものをくれた。断ったけれども、しきりに懐にそれを入れて来たので、止むを得ず貰った。これは宝石などを藉(し)くものと考えられる。その他、地球図を出して、日本はここにあり、ワシントンはここにある等、丁寧に指し示してくれた。女子と言っても文字が読め、驚き入るばかりである。此の所を出て4～5町行くと海岸に出る。暫らく海岸を眺めてその場を去る。土着で色黒いハワイ人と見える女子が7～8人道端に居て、我々を見て大騒ぎして見つめていた。その中の一人が、一弦琴の様な形の長さ一尺二三寸【約36cm】で、二弦を口に添え、手で演奏している。楽器の名前を尋ねたところ、ウテテー《pukeke:ポリネシア系の弦楽器》と言うことである。是又珍品である。夕方、宿泊所に帰る。

さて、風俗・習慣なのであろうか、外国人は疑うこともせず、その家に行くと懇懇に客を待遇し、珍品や奇品は言うに及ばず、自分の寝室或いは厨房・便所迄、もれなく公然と他人に見せる。日本において外国人が来たのを見ると、往々

にして戸を閉ざして隠れ、或いは走り去って外国人を避けるのとは雲泥の差があると言うことである。

歯車或いはベルトを用いた精密な動力伝達器械が多い。蒸気機関で大海原を平地のように進むのは勿論、諸物の運送に皆蒸気機関を用いている。自分が見る限りでは、活版印刷で印刷するのもこれを用いており、又、縫針の仕事にも是を用いている。このため、事の便利さは蒸気機関の精巧さにあると見るべきである。

鳴り物は、笛、胡弓、四ツ竹《カスターネットの様なもの》の類が多い。その他、ヲールコール《オルガン》の大小がある。又、琴に似た物がある。英館に行つて見るに、十三四歳の女子が是を演奏している。その様子は日本の「のぞきからくり」と言うものに似て、全くの箱である。その箱の中に器械を置き、前段へ長さ五六寸【18cm】、幅五六分【1.8cm】の小木を3本、2本と隔てて合計35本で構成されている。演奏するときは、手で小木を押さえれば妙音が出る。その名をピアノと言う。その製品は種々ある。今、一つを例示する。又、オルガンに似て大きな物がある。是にも歯車の精密な器械が使われており、一人傍に居て歯車を回転させれば、種々の音が出て合奏する。その名をアールゲン《オルゴール》と言う。又、一弦琴の形に似て二弦あるのを見る。これも聞くに堪えるものである。この外、数品ある。今は見たものを記載するのみである。

○寒暖計試さず

旧暦安政七(1860)年2月17日(新暦3月09日) 【2月18日】 晴、時々驟雨。

滞留【ハワイ】。午前8時頃、ガス灯の製造を見る。以下に記す。蘭語(オランダ語)の説明にガスには数種類があるとの事。一つは光ガス(Licht)、一つは炭化水素ガス(Koolwaterstof gas)、一つは油精ガス(Olie-vormend gas)である。今、その製法を見ると、鑄鉄で出来た釜6個を連ねて左右二列に配置し、釜の直径は一尺五寸【45cm】で石炭を焚いて、釜を密閉して唯二管を通し入れ(鉄或いは胴



で出来ている)、一管は囲み三四分【1.2cm】で の様に曲がったものである。細い方を釜蓋に接して広い方より鯨油をたらす。この油は、炭火の火力でガスとなる。もう一管は直径二寸【6cm】で水箱に入れてある。この水箱はどの釜にも付いている。その箱より出る管があり、この管は6釜より貫通して大管一本に直結している。大管の直径は四寸【12cm】位で、土中からガス桶に入る。その桶は周囲が四間【約7m】、高さ三間【約5m】の鉄製の桶である。この鉄桶は水中に底を上にして伏せられている。半分は水上に、半分は水中にある(この水は池の様で、周りに石を積みその中に水を入れている。) 石積みの縁から四五寸【15cm】の

所に上記の大管をこの鉄桶へ潜通させ、ガスをその中に入れる。但しガスが多く入るときは鉄桶が水上に浮かび、少ないときは水中に沈む。この状態からガスの有無を知ることが出来る。又、この鉄桶中から一鉄管を土中に潜通させ、小管数個を接続して自由に家庭へ通じさせ、席上に管の端を出して常に鉄栓でガスを閉塞させ、点火するときはその栓を抜いて種火で点火させれば忽ち燃焼する。日本の越後の国【現在の新潟県】にも天然ガスがあり、是も又ガスの類であろう。唯、人工と天然との違いのみである。

帰り道、「普濟堂」と書かれた扁額を店の前に掲げている所があり、その店を尋ねてみると中国人が薬局を営んでいる所であった。この中国人は、慷慨(意気が盛んなこと)の気が多く、共に話合いをするのに十分な人である。別の部屋に入り、互いに筆談して時間が過ぎた。互いに別れの挨拶をして会釈してその場を去った【筆談の詳細内容は巻八【02】を参照】。午後にハワイ国の王城を見る。海岸から3～4丁離れた場所で、その形は日本の城と違って、至って荒いものである。城中に入ることは許されていない。自分が行ったとき、奉行外、ポーハタン号の司令官等が来たと見えて、門内の左右に小砲隊を配備し、嚴重に警備していた。司令官にしても、小砲隊の隊列を作って音楽を演奏して帰った。この様な嚴重な場所であるが、習慣として車に男女が同乗して門内を自由に出入りしている。且つ、高貴な人々と言えども礼拝することも無く、門外数百の男女雑踏して通行人を見るようである。そうであれば、礼法では動物と同様で取るに足らないものである。しかし、器械の精密さは米国人に譲らざるを得ない。帰り道、一商店で自分をしきりに手招いている人が居た。行ってみると、種痘痕のある老女が自分を見て涙を流し、自分の手を取って椅子へ腰掛けさせ、自分の顔を撫で回した。これは老女と同様に、自分(玉虫)が種痘を患った者だと憐れんだためであろう。笑うべきことである。夜になって米国館にて音楽或いは舞踏などをして楽しむ。ハワイ国王がその場所へ来て、それを見た。大略は以下の様である。


部屋に内外有って、皆紅白の幕を張り、室外で楽隊10人(ポーハタン号の楽人)が音楽を演奏している。室内が二部屋に分かれ、各室毎に男女16人づつ相分かれて、男は女の手を取り、女は男の手を取り、或いは男女兩人互いに肩に手を上げて、良く組み合って円舞(ダンス)する。傍に一人居て指揮をしている。その指揮に従ってダンスの内容が変わる。その早い事といったら瞬時である。指揮官は兵卒を指揮するのに似ている。夜12時頃になっても終わらない。門外は小砲隊で警護している。ダンスを踊っている男女は全て米国人で、その内男一人、女二人はこの地の上官の婦人と思われる。酒席は別の部屋に設け、釣燭《シャンデリア》等が有って部屋は爛々と明るいものであつ

た。その他、皆美を尽くして人目を引いていた。

○寒暖計試さず

旧暦安政七(1860)年2月18日(新暦3月10日) 【2月19日】 晴。

午後、御奉行並びに従臣まで皆、乗船する。これは碇を揚げて出航するためではないので、何故乗船するのだろうかと疑問を持たない者は居ない。従臣の者が市街を自由に往来して異国で恥の上塗りをする事を恐れたためか、或いは出費が多くなるのを恐れたかの二つであろう。宿泊所の費用は一人当たり1ドルと言うことである。又、飲食は各自で支払うということである。銭湯は4桶【バスタブ/風呂桶の事であろう】会計で、一桶1ドルに当たると言う事である。又、4桶合計で5ドルと言うものも有るとの事。自分は実際に関与していないので詳細は分からない。唯、その費用が高いのは分かる。銭湯は長さ約9m、横約4mの家を4室に分割し、一室1桶である。傍に銅製の風呂釜があつて、水が通じている。上に銅製の如露【シャワーの事であろう】が付いている。米国人は常に水を使って湯浴みすると見えて、如露(銅製で形は円形であり、小さな穴が数十個あり、水がその中より滴り落ちる)を設けて、上から水を垂らして直ぐに湯浴みするのだろう。今回、我が日本人のため、水ではなくて湯を用意してくれたが、その冷たさはまるで水の様であった【言葉が上手く通ぜず、湯の栓を開けるのを知らずに水の栓のみを開

けたのではなかったろうか】。尤も風呂桶は日本のものと違い、 の様な形で、釜は別に設けてあり管で風呂桶と連通している。このため、少し時間が経つと直ぐに冷えてしまい、湯浴みすることが出来なくなってしまう。午後2時頃、全員乗船終了する。船上では各自の荷物でごった返していたが、夕方になって一段落した。

○寒暖計華氏75度(23.9℃) ○午前8時頃、日本全権(新見外国奉行)がハワイ駐在の米国公使の仮館に行く。

旧暦安政七(1860)年2月19日(新暦3月11日) 【2月20日】 晴。

滞船【ハワイ】。小砲隊の人達は各自装備し、時折訓練している。昨日も同じであった。午後、サンドウィッチの人であろうか、天主教を布教する者が船に来て、聖書を出して3時間程声高に聖書を読んでいた。司令官始め船中の人々が左右前後して椅子に腰掛け、謹んでこれを聞いていた。それは静かでまるで人が居ない様であった。日本におけるいわゆる説法の様なものであろう。

○寒暖計華氏75度(23.9℃)

旧暦安政七(1860)年2月20日(新暦3月12日) 【2月21日】 晴。

滞船【ハワイ】。今日は暑気が強く、船中各自単衣(ひとえ)の着物を着る。午前8時頃、補給水船が一隻来て、船中に水を運び入れる。是も歯車機構を利用したものであり、極めて便利なものである【現在のクレーンの様なものであろう】。

○寒暖計華氏76度(24.4℃)

旧暦安政七(1860)年2月21日(新暦3月13日) 【2月22日】 晴。

滞船【ハワイ】。午後2時頃小雨降るが、直ぐに晴れる。滞船中の儀式を見聞すると、通常と大分違い、大略、朝夕は大小の太鼓に笛を交えて打ち鳴らし、朝には始めに、夕方には終わりに必ず一砲を鳴らす。且つ、小砲隊の人達は各自装備し、船上に一日中控えていて、客の出入りの度に隊伍を作り嚴重に警護をしている。時々訓練する。その威儀は堂々としたものである。夜になって気温が上がり、まるで焚火をしている様で、江戸の6月頃の様である。

○寒暖計華氏76度(24.4℃)

旧暦安政七(1860)年2月22日(新暦3月14日) 【2月23日】 晴。

滞船【ハワイ】。朝冷氣になり、単衣では寒く、厚物に着替えた。午後になって漸く暑気が戻ってきた。当所ハワイ国に在留する米国人がしきりに船に出入りし、船中は雑踏していた。

○寒暖計華氏72.5度(22.5℃)

旧暦安政七(1860)年2月23日(新暦3月15日) 【2月24日】 晴。

滞船【ハワイ】。午後2時頃、当所ハワイ国に駐在の米国公使の妻子が、船中に来る。皆着飾り、色白で、土着人より優れていることは明白である。

○寒暖計華氏72度(22.2℃)

旧暦安政七(1860)年2月24日(新暦3月16日) 【2月25日】 晴、時々驟雨。

滞船【ハワイ】。もう直ぐ出航が近いので、皆お風呂に入るため、午前午後に分けて上陸する。初めて上陸した時とは違って、土着人は雑踏していなかった。


○寒暖計華氏74度(23.3℃)

旧暦安政七(1860)年2月25日(新暦3月17日) 【2月26日】 晴。

滞船【ハワイ】。朝から当所ハワイ国に在留する米国人男女がしきりに船に出入りする。午後ハワイ国王が来る。(司令官が国王に)別れを告げた答礼であろう。司令官を始め士官全員が装束に身を固め、船上に小砲隊を整列させ、ハワイ国王

が来るのを待っていた。午後ハワイ国の国旗を高く掲げて音楽を演奏し、且つ祝砲を鳴らす。船上にて司令官を始めとする士官全員が帽子を脱ぎ、【国王と】互いに握手する(是、礼儀と思われる)。それから司令官室に国王を案内し、2時間程で国王が帰る。そのとき又小砲隊を整列させ、祝砲を鳴らす。それからハワイ国の国旗を降ろす。国王は30歳位で色黒く、衣裳は至って粗末なものである。赤色の羅紗のみで装飾は無い。従者はわずかに20人程で、全員美装していた。



冠は  の様なものである。その従者の中に年齢55～56位の人が居て、その人は国王の父であり、当時日本で言えば町奉行に当たる役をしていたとの事である。又、35～36歳になる人が居て、国王の兄との事である(官職は分からない)。このハワイ国では、任務・官職を持っていなければ、国王の父兄と言っても、立場上国王の下に居るとの事である。国王は必ず王族の中から人物を選定し、その官職に就かせる。これは合衆国と似ている。王の名前は「カメハメハ」と言い、皇后の名は「エンマ」と言う。ハワイ国開闢(かいびやく)以来わずかに四世しか経っていないとの由。

○寒暖計華氏77度(25℃)

旧曆安政七(1860)年2月26日(新曆3月18日) 【2月27日】晴、東北の風。

今日碇を揚げて出航するので、朝からハワイ国に在留する米国人が船に間断なく来て別れの挨拶をしていた。午後2時頃、碇を揚げて、始め南東に向かって1.8km程進み、それから東北方向に進路を変えた。逆風なので帆を揚げる事が出来ず、蒸気機関のみで進む。夜になっても状況は同じであった。オアフ島の側を進み、夜半に大海原に出る。

○寒暖計華氏76度(24.5℃)

散土微斯島(サンドウィッチ島：ハワイ諸島のこと)

サンドウィッチ諸島は、豪斯多辣里(英国オーストラリア州)に有ると言われ、又東洋群島中とも言われている。まだその真偽は分からない。島数約11でそれぞれ接近しており、東南方向から西南に亘って存在し、北緯18度50分から22度20分、西経150から160度に至る範囲である。東南に位置していて最大の島はハワイ島と言う。火山・冰山有り(訳書に1852年10月12日、この山が烈しく震動爆発して石を噴出し、三里【12km】四方に飛散したとの記述)、一植民地(カロン)にて支配している(カロンとは、鎮台の類である)。昔、英国航海探検家クックが殺されたのは、この島である。このハワイ島に続き、マウイ、モロカイ、ラナイ、カオライ、モロキニの五島が有る。この内、モロキニは極小の島で人が住んでいない。この五島を合わせて一州で支配してい



る。オアフ島はハワイ島より小さいが、良港が有って非常に繁栄している。人口は稠密で、王府がここに有る。その港の名はホノルルと言う。カウワイ・ニハウ・レフア・カウラの四島も皆大きくは無い。レフア・カウラの二島は小さな島で、人は住んでいない。総計で三百里四方、人口80,641人と言うことである(訳書に、ハワイ島27,204人、オアフ島23,145人、ウライ島18,671人、カウワイ島6,941人、モロカイ島3,429人、ニハウ島723人、ラナイ島528人、総計80,641人とある)。一説には、18万人余とも言われている。その説の出典は詳しく分かっていないが、大体この諸島は50年前に始めて開闢し、それ以後、諸国のキリスト教の宣教師が来て土着民を教化し、年を重ねるごとにその活動が活発化している。今では独立国となっているが小国なので、主に英米二国の援助を待っているということである(訳書には、この島には古い史録は無く昔のことは分からない。1542年に初めて、この島が有るのが世界に知られた。1770年、英国航海探検家クックがこの島を発見し、その船長サンドウィッチの名前を取って名付けられた)。

#### 阿呱浦島(オアフ島)

オアフ島は第二の大島で、長さ十七里【約68km】、幅七里【約28km】である。港は南岸にあり、平地は僅かに数里位である。西北は皆山地で重なり合い、山頂は常に雲霧に覆われている。西方に二里【8km】程、東方に一里【4km】程突出して、その間大湾となっている。しかし、湾中には所々に浅瀬が有り、船舶は通行出来ない。中間の深さは僅かに10丁ばかりで、常に杭を立てて浅い事を示している。船舶は直ぐに岸に着く。現在、英米その他の船舶が多数入港している。その内、米国の船が最多である。土着人の船は70~80艘を下らない。その内、木をくりぬいて作った小船があり、日本の蝦夷地で使われている丸木舟に似たものである(訳書には、諸国の船舶がここに碇を下ろして交易を行い、或いは天気、風向きを待つて、或いは船舶を修理し、或いは新鮮な食料を補給したりすると言う)。市街は碁盤の目の様な配列で、家屋の多くは木材を使用している。或るものはレンガを使用して、数階の高楼建築となっている。諸国民が来て居住し、貿易をしている(訳書には、大商店を営んでいるのは英米人が殆どであるとの由。中国人及び土着人は大抵、菓実等の小店を営み、或いは使役人となっている。アフリカ人に至っては、皆奴隷で生産活動をすることが出来ないと言われている)。大抵、ビロード、羅紗、時計、眼鏡或いはガラス、金銀等の類で、皆珍しい細工を施して、人目を惹きつけている。又、女郎屋、劇場が有って、頗る繁盛している。市街の大きさは、近くは1~2丁、遠くは10丁【1000m】程で、英館、米館、仏

館が有り、皆美しい館である。寺(訳者註：キリスト教会のことであろう)は三箇所有り、数階建の高樓が建物の中央に設置され、天主を安置している。山麓に沿って土着人の家が有り、草葺屋根、或いは粗石を積み重ねて家を作っている。それは非常に小さいものである。その近くに水田があり、殆ど芋【タロ(Taro)芋と思われる】を植えている。畑は畦を作らずに花畑の様に平坦にして胡瓜・インゲン豆・とうもろこし等を植えている。王の居所は海岸からわずかに2～3丁で、長い木竿に国旗を付けて立てて居る。城壁は設置されておらず、広さは2丁程で周囲に塀を築いて三箇所に石門を設け、各門に一人の兵卒を警備として配置している。王宮には層樓を建て、形は日本の寺院に似た様である。王国の運営・経営は極めて雑で、王宮の外は雑草が茫々としている。唯国旗が掲揚されているのを見て、始めて王宮であることが分かる。街中の人口はおよそ8千人、その内土着人7千人、米国人500人、英国人200人、中国人250人、アフリカ人50人との事である。

#### 風俗

風俗は極めて純朴で丁重に人を待遇し、たとえ一人であっても侮ることをせず、その態度は西欧人に似ている。しかし、遊行を好み生業に励むことをせず、忠義心は薄く、男女は行動・居住の別が無い(訳書には、古来から50年前まで、穴居・野宿の島民ばかりで、礼儀等の教科は無く、まるで動物の様であった。外来の人間を見ると直ぐに寄って来てこれを食べてしまう。子供を産めば土に埋めて皆が来て踏み殺してしまう。極めて残虐無知で、唯妖怪の邪神を信仰している。1770年、英国航海探検家クックにより発見され、それ以来、諸国のキリスト教宣教師が来て、愚民を教化して全島がキリスト教に改宗し、純朴友愛の民となった。しかし、現在でも昔の風習は残り、男女の別なく婚外性交をする者が多いとの由。) 顔形は男女とも色黒く、目や瞳・毛髪は日本人を思わせる。多くの人々は手足に刺青をしている。衣服冠帽は西洋人と同じで、粗雑である。女性は僧衣の筒袖の様なものを着て、帯は用いず、胸の半ばよりはかまの様な襷(ひだ)がくるぶしの所まで来ていて、地面に接する程である。服はワンピースになっており、着るときは頭からかぶる様にする。髪は散髪しており、片側の櫛で髪を搔いている。櫛はゴム(樹液の名)、或いは角(つの)で作られており、両端が反って上に向き、このため頭上に角が生えている感じに似ている。数種類の草花を糸で結び、首には玻璃瑠、或いは草木の美実を結んで飾りとしている。耳には耳飾(鏝：かん)を付けている。それは殆ど銀・真鍮で出来ている。通常裸足で往来し、靴を使用する事は無い。子供の服は大人と同じであるが、大抵腕及び首の左右が出て

いる。外に英米人と見え、瞳が青く色白で美しい人が居る。衣服は筒袖で、肩から腰にかけて沙羅の類の色々な彩色の服を着ている。それは肌にぴったりとついて手首や足首を締めくくっている。そのうえに羅紗或いは沙羅の類のカップの様な物を羽織っている。腰下は、フープスカートと言う鯨のひげ或いは鑄鉄で出来た輪で纏めた物を履き、その上に袴の様な襷(ひだ)の有る物を二三枚履いている。その周囲の長さは、腰の数倍は有る。髪は左右に分け、造花或いは藻草の様に織り込んだ綱を付けている。その色は黒白数種類有る。又、帽子のみを用いて、飾網を用いていない人も居る。道路の往来には馬車を用いている。もし馬車を用いないときは、靴を履いて行き来する。皆美しい。細い足を尊ぶ風習と見えて、女性の足は皆子供の足の様である。又、女性は眉毛を剃ることはしない。又、この島では乗馬することが多い。土着人は馬に乗り、日中原野を駆け巡ったり、或いは馬車に酒菓子等を積んで行商をする。夜午後8時頃には戸を閉め、往来するものは殆ど無いと言う(訳書には、夜9時頃には皆戸を閉め、商店も店じまいする。妓楼の外は歌を歌ったりする者は無く、又宴を開いて飲食する者も居ない。巷では火廻り用番人を設け、一時間毎に時を知らせている。第一の巷にて時を告げれば、次の巷にてこれを聞き、次々に伝播させて瞬時に四方八方で時が分かるようになっていと書いて有る)。

### 時候

オワフ港は北緯21度の所に位置し、何時も温暖で酷く炎熱と言うことではない(訳書には、中度の暖かさを華氏75度(23.9℃)とし、各華氏60度、80度を上下の範囲としている。) 我々日本人一行が来たときは、二月中旬であったが、日本の五月頃の陽気で、暑気を感じる暑さであった。夜になると蚊や蚤が出て来て、蚊帳を用いないと眠れないほどであった。スイカやマクワ瓜は既に熟していてその味は非常に美味しいものである。菊が咲いているのを見る。また、秋海棠、日々草、千日草、鳳仙花などの草花が咲き乱れている。或る家では唐辛子が長さ1.5m位に伸びているのを見たことがある。恐らく枯れ落ちることが無いのだろう。その暖かさを知ることが出来るだろう。唯、降雨は何時来るか分からず、晴れたかと思うとまた雨が降る、この繰り返しが日に5～6回あり、雨傘を手放せない。

### 草木

草木は多く生えている。その草木の種類は大分日本とは違っている。ラワラ《校正者は分からず》と言う樹があり、その葉は蘭に似ていて幹はシュロの

様である。土着人はこの葉を採って、魚類や炭を包んでいる。又、コクナツト《ココナツツ》と言う樹があり、海岸に生えている。その葉はシュロに似て長く、幹は全くシュロの様で、葉の間に数個の実がなる。その大きさは頭位で、殻の中には水が入っていてその味は多少甘いものである。これは椰子である。又、ブレンテ《校正者分からず。パンの木と推定している》と言う樹があり、幹はシュロに似て葉は桐の葉の様である。葉の間に実がなり、形はマクワ瓜の大きなものに似て、味は美味しいものである。芭蕉は多く生えており、実を結ぶ。その形は三角形で長く、数十の実が一房になり、味は美味しい。米国名でヒナナ《バナナ》と言う。又、おおきなひさごがある。土着人はこれを二つに割り、魚や野菜を入れ、担ぎ棒で担いで行く。又、サボテンがあり、高いものでは二間【約3.5m】、葉の形は円形で、日本の物とは少し違っている。白檀(びやくだん)は、この地の名産品と言われているが、現在では少なくなっており、滞在中に見ることは出来なかった(訳書には、白檀はこの島の名産で、昔はこれを最上の輸出品として、中国と交易を行った。中国人はこのためこの島を松香島と呼んでいた。一時的に利益を上げようとして、大量に伐採したので、現在は木が少なくなっていると言われている)。草花は、秋海棠、千日草、鳳仙花などがある。野菜は、インゲン豆、トウキビ、スイカ、マクワ瓜、胡瓜等が多い。その他、小麦、コーヒー、藍、木綿、煙草、桑、サトウキビ等を産出していると言われているが、自分は見していない。松、杉、梅、竹の類は産出していない。

## 生物

鳥の類は多くない。動物は、豚、羊がいる。羊は二種類あり、一つは綿羊、もう一つは綿羊に似て角が有り、毛が短く、茶、黒或いは黄色である。羊は平生飼育していると見える。犬、猫は日本と同じである。但し、犬の大きいものは高さ二尺【60cm】、長さ三四尺【約1m位】、小さいものは高さ一尺【30cm】、長さ二尺【60cm】である。馬、牛は日本と同じであるが、牛は少なく、角が長くて屈曲している。馬は平生車を引くのに用いており、時たま乗馬にも用いる。いずれも良く調教されており、蹄で蹴飛ばされる心配は無い。大抵の馬は去勢されていると言う。車に用いる場合は、四輪馬車で一頭から六頭を用いる。車上に椅子が有り、一椅子に二人から六人が腰掛ける。天井は黒い木綿で覆われている。御者が一人前の椅子に座り、鞭を使う。馬車のスピードは飛ぶ様に早い。鞭の先端は細く、革で出来ている。この鞭で馬の尻尾を叩く。荷物を運搬するときは、二輪車に一頭を付けて用い、200貫目(750kg)を乗せると言う。又、所謂(いわゆる)ロバが居て大抵は乗馬に用いる。牛は

専ら車を引かせて運搬に用いる。極めて便利である。鳥は、鶏、七面鳥を飼育している。その他、鳩が飛んでいるのを見かける。ツバメ、すずめ、カラス、トビの類は島に滞在中、一羽も見なかった。魚は、ボラ、イナ(ボラの幼魚か)が多い。又、ボラに似た長さ1m位の魚(名前は知らない)が居る。味は美味しいけれども、多少泥臭い。外に海老の大きいものを見かける(日本の伊勢海老の様である)。一行の内の一人が言うにはアイマ(日本の参州辺りでの名)、形は鯛の様で薄く鱗は無い。又、ウブナ(一名オーガン、参州ではウブナと言ひ、西国ではオーガンと言ひ)に似た魚がいる。又、コノシロに似た魚が居ると言ひ。きっと時節に拠って種々の魚が居るのだろう。現在目の前に有る魚についてのみ記述している。虫は、蚊・蠅の類が居る。蠅が尤も多い。朝夕に群れをなして来る。赤蟻の小さいものが居る。青い色の大きなトンボが居る。ムカデも居る。コオロギ・蝶の類は見た事がない。或る人が言うには、夜中に虫の音を聞くが、その声がどの様なものであるかを形容するのが難しく、虫類も時節によって多少するのであろう。

#### 貨幣

この島では貨幣を鑄造しているのを見た事がない。英・仏・米国等の金銀貨幣が一般に通用する。

#### 物価

諸々の生活必需品について、この地で生産しているものは少なく、殆どは英国・米国・仏国・中国・オランダの諸国から輸入している。価格は極めて高い。現在知る限りでは以下の様である。

一 米一升八合	1ドル
一 酒一合	25セント
一 鶏の卵24個	1ドル
一 カボチャ5個	50セント
一 イナ6尾	25セント
一 靴一対	1ドル50セント

#### ホテル

ホテルは海岸から16-17丁離れた所にあり、仏国人経営のホテルである。全てレンガ造りである。外壁は白く塗ってあり、その厚さは一尺四五寸【約45cm~60cm】程である。日本の土蔵・煉塀の様である。高さは二階建てで、二間から三間【3.5~5.5m】の部屋に縦一縦四尺五六寸【約1.4m】、横三尺【約1m】

のガラス窓が有り、日本の様な障子窓は全くない。且つ、ござは無く、絨毯を用いており、靴を履いて出入りする。各部屋には人数に応じた椅子が有る(上等なものはビロード製、下等なものは、菅或いはアンベラ製《筵の類》である)。寝室には縦一間【1.8m】、横半間【0.9m】、高さ三四尺【約1m】の寝台が有り、上には白木綿を掛け、左右に薄木綿を張っており、日本の蚊帳に似た物となっている。布団は白木綿に鳥の羽或いは木屑を厚く入れたもので、一層或いは二層にして敷き、白い羅紗に似た毛が長いものを体に掛けて寝る。その名をブランケットと言う。棟数は8棟有り、その内、4棟は酒屋・浴場・料理店・所有者の居所となっている。その他の4棟に、使節団一行が宿泊する。その内の二棟は大きいもので、二階建てになっている。御奉行から調役に至るまでは後の棟に宿泊する。徒目付(かちめつけ)等は前の棟に宿泊する。自分【玉虫】らの宿泊所は、その棟の下手にある場所である。【玉虫らのグループは】総計36人で二班に分かれ、一斑は調役より下の諸役人から中小姓まで、もう一斑は徒士から僕隸である。人数が多いため、混雑する。また寝室が少なく、下にむしろを一枚も敷いていない。ごみは四隅に溜まっており、全く汚いものである。仕方なくここに寝る。船上の部屋の狭さには苦しんでいたのも、一行は上陸して気晴らしをしたいと思ったが、部屋の汚さに失望し、逆に船に帰りたいたいと思うようになった。

#### 妓楼(遊郭)

街中に妓楼が数箇所有る。その中の一樓を見ると三階建てで、一階は酒を商い、側でバイオリンを演奏している(日本の胡弓の音色に似ていて、その形は琵琶の様である)。或いは、鉄箸三本を三角形にして結んだものに四つ竹を加えて、拍子を取りながら打ち鳴らしている【トライアングルのことか】。歌声は無いが、鬱な気分を蹴散らすのに十分である。二階部分には、芸妓が十人程椅子に座っている。三階は一辺が一間【約2m】程の四角形の部屋が十箇所有る。我々日本人を見て驚くことも無く、かえって手を取って引き入れようとする。幸いにしてその場を逃れて来たが、固(もと)より万国の船が出入りする港であることから、外国人に親しむことはこの様であるのだろう。

#### 酒店

酒店には店の中に二間【4m】から三間【5m】程のテーブルが置かれている。高さは大抵腰より低い(但し、店の大小により、高さは色々なのであろう)。後に仕切り板を設け、グラスを並べて酒を貯蔵している(チェリー酒・ビール・パンチ・ワイン)。客が来ればテーブルの上にコップを並べて、客の好みに

従って酒を出す。セットとしての酒の肴は出さない。左右に色々の額が掛かっている。皆ステンドグラス画で、人馬に羽が生えた形や或いは女性の裸体など、全て奇々妙々の形を描いたものである。その側で突玉をして遊んでいる者が居る。ビレタイホ《ビリヤード》とすることである。或いは投玉《ボーリング》をしている者が居る。ビリヤードは、一間【2m】四方のテーブルを設け、四隅或いは中央に穴が有り、テーブルの上に色の付いた玉を四つ置き、杖《スティック》にて玉を突き、穴へ入れる。これで勝敗を決めると言う。ボーリングは五六間【11m】程の長さの弓場の様な板敷きで右に小さな溝が有り(これは投げた玉が外へ出て行くのを防ぐためだろう)、左に欄干の様なものが二つ有り、玉が転がる間に高低差を付けた溝がある(これは投げた玉を元に戻すとき、この溝に入れば自動的に戻るようになっている)。一尺【30cm】程の小木を数本立てて遠く離し、円周一尺【30cm】或いは二尺【60cm】の鉄丸(丸はまん丸ではない)を投げる。その回転により小木を倒す。その倒れた数によって勝敗を決める。その他、色々のものがあるのだろう。滞在していたわずかの時間で見たことを記述しておいた。

【巻一 終】